

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

ひふみ神示 3 言霊と氣で読み解く

その1

光は神から人民に与えられている。光に向うから照らされる。光は、キ、真、善、美、愛となり、またその裏の、○（身）、偽、悪、醜、憎となり現れるぞ。とあります。氣で読み解きましょう。

人間は心と身体とを持っています。しかしそれだけでは何の働きも起こりません。氣の流れがあり、それが身体を動かします。では氣の流れはどうやって作るのでしょうか。

その前に心とはについて説明が必要です。心とはある人がある事象をみて、言葉を選んで他の人に伝えます。（言葉を運ぶ船）その時の言葉の選び方の癖がその人の心です。

次に心で「思う」「考える」の違いについて

「思う」は例えば動作をするとき、歩こうと思う、走ろうと思う、休もうと思う と言うように心で言葉が選ばれ、身体が歩く、走る、休むの動作に変わります。

「考える」は動作がなく、対象物を頭に浮かべ、あれこれイメージ（言葉を選び）想像することをいいます。

「思う」は氣の流れが自分の身体から外に流れます。

「考える」は 氣の流れが自分の身体の内側に流れます。

氣の流れが自分より外に流れる状態の心は「光り」を向いているときに起こります。

氣の流れが自分の内側に向いているときはひかりの逆で「影」を向いているときに起こります。 「参考 言霊-1」

・・・その2に続く

その2

「思う」という行為を更に深く突き詰めると、田の下に心という漢字を使っています。かつて日本人は田の事を言霊五十音図を例えて表現しました。言霊五十音とはアイウエオの縦の五列とアカサタナハマヤラワの横の十列の表です。全部で五十のマス目が出来ます。これを言霊五十音図と言います。それを田と表現しました。

田の下に心つまり下丹田に鎮めた心（落ち着いた心）が五十音の表の中から言葉を選んで言葉を組み合わせる事を「思う」といいます。 そうすると氣が流れ出します。この氣の流れは大自然の氣と合流して流れます。「思う」は最初に一つである自分からの主体的な行為となります。（古事記と言霊より）

次に「考える」は自分とは別の対象物があり、それを前提に心があれこれと想像します。

最初に二つあるものから一つの方法を推測します。これを神（かみ）還る（かえる）といいます。それが考えるの語源です。

考えるは内に向かって働くだけで氣の流れは外に出てきません。身体を動かす力（氣の流れ）とはなりません。

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

考えるは頭で考えると表現します。肚で考えるとは言いません。肚は思うです。

そうすると「思う」と「考える」は言葉を選ぶ事は同じでも心の置き所が違います。

「思う」は肚（下丹田） 「考える」は頭と言うことになります。

どちらも人間が生活を営む上では必要なことですが、行動を伴うときに考えているは氣の流れがなく、本来の自分の実力は発揮出来ません。

・・・3に続く「参 言霊-2」

その3

もう一つ大事なこと、同じ「思う」でも「思う」内容ですが、下肚で思っているも光りを思うことと、影を思う事とは氣の流れがどうなるかと言うことです。

光り→氣の流れは自分より外に向かって起こります。流れが続きます。

影→氣の流れは自分の内に向かって起こります。自我のバイブレーションにぶつかり流れが止まります。

自我とは生まれた赤ん坊の時の心が成人して大人になる間に、身に付けてきた価値観、宗教観、道徳倫理観、総てを含んだ心、のことを指します。

思うことをもう少し深く考え進めてみますと、思うとはものにつけられた名を浮かべ、言葉「言霊」を選びフレーズを作ります。その全体像が光りに向かうか、影に向かうかで氣の流れの方向が決まります。

アイウエオ五十音はそれぞれバイブレーションがありますが、それがフレーズで、重なり合いまた全体のバイブレーションとなります。

「言霊」ここではアイウエオ五十音の単音一つ一つのことを指します。

次にバイブレーションについて説明が必要です。（古事記と言霊より）

人が話す言葉は声として認識しますが、話す相手が音を出している訳ではありません。鼓膜を振動させるバイブレーションを相手が出してそれが鼓膜を振動させて頭の中で音に変換されます。また色はいろいろな色があり見えているのではなくバイブレーションが発せられているのを目が捉えて色に変換され色を認識します。

この宇宙は無色無音で存在しています。人間の頭で音と色に変換されます。

ここで不思議なことに世界中の人たちが私の声は私の声として認識できます。例えば法隆寺の鐘の音は総て同じ音に聞き分けられます。これは人間の頭の中にバイブレーションとシンクロナイズして音、色に切り替える同じものが（創造知性）存在しています。

そのおかげで世界中の人は同じ鐘の音を聞き分けられます。

・・・4に続く

その4で本題にもどり

光りは神から人民に与えられているとはどういうことか

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

光り キ、真、善、美、愛

例えばこの光り、キ、の列を 手を前に伸ばし、キィ〜と肚に心を置いて発音しながら音を出し続けます。そのバイブレーションが氣の流れを自分から外に起こします。

その時前に伸ばしている人の手を、曲がる方向に力を入れて曲げてみましょう。腕の中に氣の流れが起こりその腕はどんなに力持ちが曲げても決して曲がらない強さになります。

さらに他の言葉も 真ン〜、善ン〜、美ィ〜、愛ィ〜、光リィ〜、総て強くて曲がらない腕になっています。

すなわち 誰でも皆、光りを思い、またキ、真、善、美、愛を思うときは総て氣の流れが外に現れ出て強い状態になると言うことです。キは霊を表します。

その裏 影の〇（身）、偽、悪、醜、憎 〇は身を表します。

次に身ィ〜、偽ィ〜、悪ウ〜、醜ウ〜、憎ウ〜と言いながら同じ事をやってみると、氣の流れが内に向き自分の自我のバイブレーションとぶつかり止まります。腕の力が出なくなり簡単に曲げられてしまいます。

誰でも、つまり光りに向くと強く（氣の流れが続き）、影に向かうと弱くなるということです。（氣の流れが止まり）

バイブレーションは発音しなくても心で言葉を選び思うだけで起こります。

先ほどの例は声を出しましたが、今度は声を出さず思いながら手を出しても同じ結果となります。

ただし自我の思いがない人が、（無心の人）は影の言葉を思っても内向きの流れが止まりません。自分の身体を通して陰の世界へ氣の流れの流れが続くため、腕が曲がりません。（氣の流れが止まりません）この状態を受け入れると言います。

自我の思いがない人（無心の人）とは、生まれた赤ん坊のような心の持ち主のことです。

つまり何事もありのまま受け入れることが出来る人のことです。

我々にとって一番不幸なのは、自我がそこにあり、影を思いながら行動する人です。破滅の道に進むより他ありません。自分がそうするのです。

だから光りを向く事が大切なのです。希望もそうです。と、ひふみ神示は言っています。

・・・5に続く

その5

光りに向かうから照らされます。

それは「自分の思いが光りに向かうときは氣が外に流れ出て強い状態になる」と言うことです。つまり、光りに向かい光りを思い行動している人は、その状態はどんな影も（悪い状況も）受けないようになっています。影は光りには何も出来ないからです。この時思いは自分の外に向いています。（利他の道）

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

逆に「思いが影を見続けると氣は内にしか流れず自我のバイブレーションとぶつかりどんどん疲弊していきます。そして身体の状態が病んでいきます。」

自我にぶつかりと自分の思いが内に流れ、更に内に入ります。つまり思いが自分の事にどんどん集まります。(自利の道) 悪循環に陥ります。

この時自分の思いを外に向ける言葉があります。どんな悪いことが起こってきても、他人から罵られようが、「ありがとう」と心の中でつぶやくことで変わり始めます。感謝は氣の流れを光りに向かわせるのです。

悲しみは氣の流れを内に向かわせる変化点です。

光りは、出て行く氣の流れを起し 影は自分に迫ってくる氣の流れを表します。

つまり氣の流れは自分を中心として外に流れるか内に流れるか、二つしかありません。

悪い知らせは総て自分に迫ってくる氣の流れを指します。

嬉しい知らせは外に流れ出る氣の流れです。

どちらも必要なのです。 光り(善、心=キ)も影(悪、身)もどちらも必要なのです。

悪を抱き参らせて進むのが本来の道とひふみ神示が言う意味はこのことです。

これを古代の日本人はものに例えて表現しました。

自分の御魂を 勾玉

自分から出て行く氣の流れを 劍

自分に入ってくる氣の流れを 鏡

と表現しました。

三種の神器と言いました。

ひふみ神示より

マツリ=真釣り=祭り

「キがわからねばならん。キのキがわからねばならん。男の魂は女、女の魂は男と申してあろう。人間の目に愛と映るものは外の愛、真と映るものは外の真ぞ。中から申せば外は御役の悪であるぞ。今が過去で、今が未来ぞ。空間に心ふみ迷うでないぞ。皮一枚脱いで心でよく考え為され。いつも日が出ているではないか。月輝いて御座る

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

でないか。力そのものに、力はないのであるぞ。霊と肉の結びのみで力現れるのでないぞ。プラスとマイナスと合わせて組み立てると力出ると思っているであろうが、一歩踏み出さねばならんぞ。プラスとマイナスと合わせたのではプラスとマイナスぞ。力が無いのぞ。キの力が加わってそこにヨロコビ出て、理(みち)となり、なり、なりて真実と現れるぞ。弥栄が真実ぞ。神ぞ。神の心ぞ

マツリから出直せよ。天地みよ。大きマツリ致して居ろうがな。霊と肉のまつり第一。頭と肚のまつり結構。夫婦のマツリ、出船の港ぢや。奥からくるものは喜びぢや。念ぢや。力の元ぢや。生きの生命ぢや。神様には肚を向けなさい。

人民は土でつくったと申せば、すべてを土でこねてつくり上げたと思うから、神と人民とに分かれて他人行儀になるぞ。神のよろこびで土をつくり、それを肉体のカタとし、神の歡喜を魂としてそれにうつして、神の中に人民をイキさしているのであるぞ。取り違いせんように致してくれよ。親と子と申してあろう。木の股や土から生まれたのではマコトの親子ではないぞ。世界の九分九分九厘であるぞ。あるにあられん、さしも押しも出来んことがいよいよ近うなったぞ。外は外にあり、内は内にあり、外は内を悪と見、内は外を悪として考えるでないぞ。それは善と悪ではないぞ。内と外であるぞ。外には外のよろこび、内には内のよろこびあるぞ。二つが和して一となるぞ。一が始めぞ、和して動き、動いて和せよ。悪を悪と見るのが悪。」

その1

では氣で読み解きを試みてみましょう。前に光りと闇について読み解いた内容をアップしました。その内容を理解できているものとして話を進めます。

「キがわからねばならん。キのキがわからねばならん。男の魂は女、女の魂は男と申してあろう。」

キのキとは神の心=キ=直霊

次に氣とは=動いているキ

心が思うと言霊によってバイブレーションが現われキが動き氣となって現われる

相対するもので共に同じ比率 真に釣り合う=マツリ=祭り=祀り で和して1つになっている。

神 と 人

男 と 女

霊 と 肉

内 と 外

男と現れ出た者の内には女の魂

女と現れ出た者の内には男の魂

・・・2に続く

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

その2

「人間の目に愛と映るものは外の愛、真と映るものは外の真ぞ。中から申せば外は御役の悪であるぞ。今が過去で、今が未来ぞ。空間に心ふみ迷うでないぞ。皮一枚脱いで心でよく考え為され。」

目に映る愛は現れ出た愛つまり外の愛 その前に心で思う愛（つまり内の愛）の結果

目に映る真は現れ出た真つまり外の真 その前に心で思う真（つまり内の真）の結果

内 と 外

善 と 悪

霊 と 肉

今が過去（霊の現れ出た結果肉体として今ある状態） 今が未来（霊の思うことが未来を決める）

空間に心ふみ迷うでないぞ （心の次元は過去も未来もなく自由に行き来できる。つまり空間に左右さ

れないものである。それなのに過去にとらわれ心を過去に置き去りにするでない。心で思うことは未来を創るものである。）

…3 に続く

氣で読み解き その3

「いつも日が出ているではないか。月輝いて御座るでないか。力そのものに、力はないのであるぞ。霊と肉の結びのみで力現れるのでないぞ。プラスとマイナスと合わせて組み立て力出ると思っているであろうが、一歩踏み出さねばならん

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

ぞ。プラスとマイナスと合わせたのではプラスとマイナスぞ。力がないのぞ。キの力が加わってそこにヨロコビ出て、^{みち}理となり、なり、なりて真実と現れるぞ。

弥栄が真実ぞ。神ぞ。神の心ぞ」

読み解きを試みます。

昔の人は概念的なものではなく、ものにたとえて現した心の事を「天」 現実界のことを「地」と表現した（古事記と言霊より）
 でまずこの言葉から
 「いつも日が出ているではないか。月輝いて御座るでないか。」

霊界の日がありそれが現実界に映し出されているのが今我々が見ている太陽
 それがいつも出ていることは霊界にいつも太陽があるということ

月が輝いているということは太陽に輝きがあり霊界の太陽から現実界（地）の太陽への氣の流れがあるということ

霊界の太陽 現実界の太陽（地に映った太陽）これだけでは力にならない、霊界の太陽から現実界の太陽に氣の流れが常にあることで輝きが生まれる。

「霊 と 肉 」つまり 「心 と 身体」があるだけでは力（創造する力）とはならない

そこに氣の流れ（キの力）が必要 氣の流れは手足の動きという形で現われる。

しかし思うだけでは霊と肉が和することはない。「身魂とは霊と身体が1つになった状態つまり和していること」つまり霊が思い肉が行動してこそ身魂になり、喜び生まれ、道となり、真実と現われる（現実化する）喜びが弥栄「神の歡びが光となりキ真善美愛となって現われ・・・」が真実ぞ。神ぞ。神の心ぞ

・・・4に続く

その4 氣で読み解き

「マツリから出直せよ。天地みよ。大きマツリ致して居ろうがな。霊と肉のまつり第一。頭と肚のまつり結構。夫婦のマツリ、出船の港ぢや。奥からくるものは喜びぢや。念じや。力の元ぢや。生きの生命ぢや。神様には肚を向けなさい。

外は外にあり、内は内にあり、外は内を悪と見、内は外を悪として考えるでないぞ。それは善と悪ではないぞ。内と外であるぞ。外には外のよろこび、内には内のよろこびあるぞ。二つが和して一となるぞ。一が始めぞ、和して動き、動いて和せよ。悪を悪と見るのが悪。」

その4

まずこのフレーズから

「マツリから出直せよ。天地みよ。大きマツリ致して居ろうがな。霊と肉のまつり第

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

一。頭と肚のまつり結構。夫婦のまつり、出船の港ぢや。奥からくるものは喜びぢや。念ぢや。力の元ぢや。生きの生命ぢや。神様には肚を向けなさい。

ここまで続けて読んでいただいた皆様には、もうお分かりかと思いますが。

「まつりから出直せよ」は 神と人 霊と肉 男と女 内と外 善と悪・・・和合して一つであることから始めなさいということ（頭と肚）これも同じであると言っている（頭で考えることと肚で思って行動をすること）もう少し説明を加えると（頭で考えることは氣を引き寄せること 肚で思うことは氣を出しながら行動すること）肚で思って行動しないのは身魂が和合しないため不完全となり創造的な力が生まれず物事が実現しないことになる。それは自分の中に影がたまり光りが薄くなることにつながる。

ひいては実現力がどんどん無くなることになって現われる。

和合できたら喜びが出てきて、念が強くなり、力の元となって現われ生命としてのいきいきした息吹が現われる。実現力となって現われる。

神に肚を向けるとは真っ直ぐ神に（光りに）向けということ

ここまで読み解くと「外は外にあり・・・悪を悪とみるのが悪」の意味が分かってくると思います。

このようにひふみ神示は生き方を示してくれる

古事記と言霊は氣の原理そのもの

以上

ひふみ神示を言霊と氣で読み解く 3

「地上界に山や川もあるから霊界に山や川があるのでない、霊界の山川がマコトぞ、地上はそのマコト（〇九十）の写しであり、コト（九十）であるぞ、マ（〇）が霊界ぢや、地上人は、半分は霊界で思想し、霊人は地上界を足場としている、互いに入れ替わっているのぞ、このことわかれば来たるべき世界が、半霊半物、四次元の高度の、影ない嬉し嬉しの世界であるから、人民も浄化行せねばならん、大元の道にかえり、歩まねばならん、今までのような物質でない物質の世となるのであるぞ。

そなたの苦勞は取り越し苦勞。心配り忘れてはならんなれど、取り越し苦勞は要らん。そうした苦勞は、そうした霊界つくり出して、自分自身が要らぬ苦勞するぞ。何事も神に任せよ。そなたはまだ神業の取り違いして御座るぞ。そなたの現在与えられている仕事が神業であるぞ。その仕事をより良く、より浄化するように行じねばならんぞ。努めた上にも努めねばならん。それが御神業であるぞ。そなたはそなたの心と口と行いが違うから、違うことが次から次へと折り重なるのぢや。コト正して行かねばならんぞ。

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

苦を樂として行かねばならん。苦を心するから苦しくなるのぢや。樂と心すれば樂と出てくるのぢや。ちょっとした心の向け方、靈線のつなぎ方ぞ。そなたは悪人は悪人ぢや。神として拝めとは無理ぢやと申しているが、一枚の紙にも表裏あるぞ。そなたはいつも裏ばかりみているから、そんなことになるのぢや。相手を神として拝めば神となるのぢや。この世は皆神の一面の現れであるぞ。

靈の形は肉体の形、肉体は靈の形に従うもの。このことわかれば、この世とあの世の関係がはっきりするぞ

中の自分と外の自分と和せよ。それが改心の第一歩。聞かせてきくならば、実地はカタのカタくらいで済むなれど。欲入ると邪氣湧く、邪氣湧くと邪氣集まるぞ。肉体人には神は直接わからんものぞ。神は^{はたら}能き、神の働きの影しかわからんものぞ。神の姿、見たと申すのは、神の姿の影を自分の心に描きだしたまでであるぞ。心にわかってても肉体にはわかるものでないぞ。肉を魂とせよ。魂を魂の魂と向上させよ。ひらけ来るぞ。何事も咎むで無いぞ。咎む心、天狗ぞ。神の前にへりくだり、へりくだってもなお過ぎるということはないのじゃ。人間は、色とりどりのそれぞれの考え方を自由にあたえてあるのだから、無理に引っ張ったり、教えたりするでないぞ。今あるもの、今生きているものは、たとえ極悪ざと見えても、それは許されているのであるから、あるのであるぞ。他を排すでないぞ。

イノリとは意が乗ることぞ。靈の靈と、靈の体と合流して一つの生命ととなることぞ。実力であるぞ。想念は魂。靈の世界に属し、靈に生きるのであるぞ。ものは靈につけられたもの、靈の靈は、靈につけられたものであるぞ。ものにはものの生命しかない。眞の生命は靈であるぞ。生命の元の喜びは靈の靈であるぞ。靈の靈が主ざと申してあろう。奥の奥の奥の、は大神に通ずる、であるぞ。喜びであるぞ。ある為に人間となり、人間なるが故に神となり、神なるが故に喜びであるぞ。他のいきものにも、あれど、外の、であるぞ。

うちの自分は神であるが、外の自分は先祖であるぞ。先祖をおろそかにするでないぞ。先祖まつことは自分まつることぞ。外の自分と申しても肉体ばかりでないぞ。肉体靈も外の自分であるぞ。信じ切るからこそ飛躍するのぢやぞ。不信に進歩弥栄ないぞ。肉体靈も外の自分であるぞ。まかせ切るからこそ神となるのぢや。神に通ずるのぢや。他力で自力であるぞ。真剣なれば百年たっても同じ所ウヨウヨぢや。一步も進まん。進まんことは遅れていることぞ。真剣なれば失敗してもよいと申してあろうが。省みることによってさらに数倍することが得られるのであるぞ。いい加減が一旦成功しても土

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

台ないから泡沫ぢゃ。下座の行、大切。」

その5

氣と言霊で読み解いてみましょう。

「地上界に山や川もあるから霊界に山や川があるのでない、霊界の山川がマコトぞ、地上はそのマコト（〇九十）の写しであり、コト（九十）であるぞ、マ（〇）が霊界ぢゃ、地上人は、半分は霊界で思想し、霊人は地上界を足場としている、互いに入れ替わっているのぞ、このことわかれば来たるべき世界が、半霊半物、四次元の高度の、影ない嬉し嬉しの世界であるから、人民も浄化行せねばならん、大元の道にかえり、歩まねばならん、今までのような物質でない物質の世となるのであるぞ。」

前回のマツリを思い出してください

光と影 霊と肉 内と外 善と悪 . . . 地上界（地）にあるものは霊界（天）の写しである マコト＝誠＝真＝信＝実 マ＝霊界＝天 コト＝地上界＝地 全ての地上界にあるものは、（つまり実在するものは霊界にあり地上界で目に見えるものは）霊界の写しであるといっている。

地上人は（つまり我々は）、半分は霊界で思想し、霊人は（肉体を持たずに存在している霊的人）地上界を足場としている、互いに入れ替わっているぞ、

地上人としてこの世に生を受けたものはすでに霊と肉を両方を手に入れているので 霊的動きとは思い巡らすこと（思想し）、肉的生活とは手足を使って（霊の思うことで氣の流れが起こり、それを手足に通して）動き創造的な活動をする

別な視点から

霊人が地上界で活動するためには肉体が必要であり肉体を通して初めて地上界で活動が出来る。

肉体は霊がなければ「思うことが出来ず」身体を動かすことが出来ない。 霊の思いが氣を流し肉体を動かしてこの地上界に創造的な活動が出来る。霊人は地上人（霊と肉を手に入れて生活している我々）の思いに同調してその身体を通して創造的活動をこの地上界になすのである。

我々が思う内容が、引き寄せる霊人の種類を選んでしまうこと、これが最も重要な点。

引き寄せた霊人は肉体を通して創造的活動する。地上人はあたかも自分一人の思いでそれをなしているように思っている。

このこと分かれば来たるべき世界が、半霊半物、四次元の高度の影ない嬉し嬉しの世界であるから、人民も浄化行せねばならん、大元の道にかえり（神の入れ物）、歩まねばならん、今までのような物質でない物質の世界となるのであるぞ

半霊半物とは霊の存在として半分、肉体（物質）の存在として半分、分かりやすく表

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

現すると心の比率が半分、身体の比率半分、が四次元高度の影ない嬉し嬉し世界 つまり四次元の高さの空間時間を超えた（不老不死の）影ないは（神の喜びの＝光り＝真善美愛に向かう）世界

半霊半物になると上記のように影のない喜びの世界となる

物質でない物質の世界とは

別の所にひふみ神示は言っている（物質ではその半霊半物の人は壊すことが出来ないつまり水爆でもびくともしない身体になっていると）

半霊になるとは心が常に、神の歓びに向かう人＝光り＝真善美愛になること 影がささない心になっていること 浄化すること大元に帰ることといっている。

・・・その6に続く

その6

「そなたの苦勞は取り越し苦勞。心配り忘れてはならんなれど、取り越し苦勞は要らん。そうした苦勞は、そうした霊界つくり出して、自分自身が要らぬ苦勞するぞ。何事も神に任せよ。そなたはまだ神業の取り違ひして御座るぞ。そなたの現在与えられている仕事が神業であるぞ。その仕事をより良く、より浄化するように行じねばならんぞ。努めた上にも努めねばならん。それが御神業であるぞ。そなたの苦勞は取り越し苦勞。心配り忘れてはならんなれど、取り越し苦勞は要らん。そうした苦勞は、そうした霊界つくり出して、自分自身が要らぬ苦勞するぞ。何事も神に任せよ。」

取り越し苦勞とは先の心配をすること、たとえば会社が倒産したらどうしようとか、今仕事がなくて貯金がなくなったらどうしようとか、まだ起こってもいないことを思い不安になることはするな。心配りは忘れてはならんなれど、とは先々会社が倒産するようなことがあれば今の自分の仕事の中で何処の企業でも役に立てるスキルを身に付ける行動を取っている心配り、貯金がなくなったらどうしようかは、もしもの時に仕事を見つけて新たに稼げるまでの期間なんとか耐えられるだけの貯金をつくる行動を起こす心配り。は必要である。

取り越し苦勞の心配とか不安は、そうした霊界をつくり出して、自分自身が要らぬ苦勞をするとは、常につくり出した思い（霊界）に心を向けてしまい、今の現実界に充分心を向けることが出来なくなり、ミスを犯したり、トラブルを引き起こし要らぬ苦勞をするということ また心配とか不安のつくり出した霊的世界に自分の心がアクセスして要らぬ苦勞をする羽目になるとのこと 心配りをして今に心を向けて（心と身体「霊と肉」を和合させて）今の仕事そのものが今の自分の天職（神業）であるぞ、今の仕事が嫌で他に自分にはもっとやりたいことがあると思いを飛ばすのは止めなさい。全て後は神に任せなさいといっている。その仕事をよりよくより浄化するよう、とは、光りに＝真善美愛に向かうように質を変えていくことを努力しなさい後は神に任せなさい

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

(放って置けば良い)。

・・・その7に続く

その7

「そなたはそなたの心と口と行いが違うから、違うことが次から次へと折り重なるのぢや。コト正して行かねばならんぞ。苦を楽として行かねばならん。苦を心するから苦しくなるのぢや。楽と心すれば楽と出てくるのぢや。ちょっとした心の向け方、霊線のつなぎ方ぞ。そなたは悪人は悪人ぢや。神として拝めとは無理ぢやと申しているが、一枚の紙にも表裏あるぞ。そなたはいつも裏ばかりみているから、そんなことになるのぢや。相手を神として拝めば神となるのぢや。この世は皆神の一面の現れであるぞ。」

心と口で話すことと、行いが違うから、違うこと(自分が望まないこと)が次から次へと折り重なるのぢや。(次々に起こるのだ)。コトを正して(言葉と行いを正して)行かねばならんぞ。苦を楽として行かねばならん。とは(物事の嫌な面を見るから苦になるのです。光の当たる面を見れば楽になる)心の向ける方向が違っているのだ。つまり霊線(対象事物への思いの向け方)が問題である。

悪人を神として拝めとは無理ぢやと申しているが、その悪人のなした光に当たる面を神として拝めば神となるのぢや。この世は皆神の一面の現われであるぞ。ということになる。

・・・その8に続く

その8

ひふみ神示3 読み解きの続き

「霊の形は肉体の形、肉体は霊の形に従うもの。このことわかれば、この世とあの世の関係がはっきりするぞ

中の自分と外の自分と和せよ。それが改心の第一歩。聞かせてきくならば、実地はカタのカタくらいで済むなれど。欲入ると邪氣湧く、邪氣湧くと邪氣集まるぞ。肉体人に

は神は直接わからんものぞ。神は^{はたら}能き、神の働きの影しかわからんものぞ。神の姿、見たと申すのは、神の姿の影を自分の心に描きだしたまでであるぞ。心にわかってても肉体にはわかるものでないぞ。肉を魂とせよ。魂を魂の魂と向上させよ。ひらけ来るぞ。何事も咎むで無いぞ。咎む心、天狗ぞ。神の前にへりくだり、へりくだってもなお過ぎるということはないのじゃ。人間は、色とりどりのそれぞれの考え方を自由にあたえてあるのだから、無理に引っ張ったり、教えたりするでないぞ。今あるもの、今生きているものは、たとえ極悪ざと見えても、それは許されているのであるから、あるのである

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

ぞ。他を排すでないぞ。」

読み解いていきましょう

霊が先にあり肉体はそれに従うもの つまり心で描いたもの（霊が常に思い続けている自分）に肉体はなっていくとっている。

中の自分と外の自分と和せよ とは（霊的自分の思いと肉体の自分の行動を一致させよということ）

実地はカタのカタくらいで澄むなれど（思いと行動つまり霊と肉体を一致させるのは）比較的やりやすいが、思いに自我の欲が入ると邪氣が入るので、邪氣が集まりとんでもないことになる。思いは必ず邪氣の湧かない神の歓び＝光り＝真善美愛に向けたものでないとだめである。

肉体人には（霊と肉の比率で肉の比率が多い人）神は捉えることが出来ない。神の働きの影とは（ある人が奇跡に近いことを成すこと＝神がその人を通して働きとして現れ出たもの＝神の働きの影）

心でわかってても肉体にはわかるものでないぞ＝心でわかってても肉体の五官（見覚、聞覚、臭覚、触覚、味覚、）でわかるものではないと

肉を魂とせよ。魂を魂の魂と向上させよ 肉を魂とせよ＝五官は肉体に付いている、その五官の更に先の超五官（見えないものを見ようとして感じるもの、聞こえないものを聞こうとして聞こえるもの、匂いの先の先を感じようとするもの、触れている感覚の先の先を感じようとする、味わっている感覚の先の先を感じようとする）に広げよ。魂を魂の魂と向上させよ＝荒身魂→和身魂→直霊と向上させよ

直霊とは神の歓び＝光り＝太陽＝そのものの霊＝わかりやすくその人の良心のこと

「何事も咎むで無いぞ。咎む心、天狗ぞ。神の前にへりくだり、へりくだってもなお過ぎるといことは無いのじゃ。人間は、色とりどりのそれぞれの考え方を自由にあたえてあるのだから、無理に引っ張ったり、教えたりするでないぞ。今あるもの、今生きているものは、たとえ極悪ざと見えても、それは許されているのであるから、あるのであるぞ。他を排すでないぞ。」 これは読み解くまでもないそのままです。

・・・その9に続く

その9

「イノリとは意が乗ることぞ。霊の霊と、霊の体と合流して一つの生命ととなることぞ。実力であるぞ。想念は魂。霊の世界に属し、霊に生きるのであるぞ。ものは霊につけられたもの、霊の霊は、霊につけられたものであるぞ。ものにはものの生命しかない。真の生命は霊であるぞ。生命の元の喜びは霊の霊であるぞ。霊の霊が主ざと申してあるう。奥の奥の奥の、は大神に通ずる、であるぞ。喜びであるぞ。ある為に人間となり、人間なるが故に神となり、神なるが故に喜びであるぞ。他のいきものにはにも、

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

あれど、外の ㄨ であるぞ。」

読み解きましょう

イノリとは意が乗ることぞ。霊の霊と、霊の体と合流して一つの生命となるぞ＝霊の霊とは自分の良心、＝直霊＝神の心 霊の身体とは、言霊（アイウエオ）で発せられる音（バイブレーションのこと）合流して一つの生命となることぞ と言っている。想念は魂。霊の世界に属し、霊に生きるのであるぞあ＝想念はたとえば身体は持たないが霊（怨霊 太宰府天満宮に祀られる前の菅原道真公）に生きたように。

ものにはものの生命しかない。ものの生命とは＝もの形を維持し作り続ける氣の動き、崩壊すると命が尽きることになる。

真の生命は霊であるぞ。霊とは想いをつくり出されもの、さらにつくり出すものを指す。またつくり出された想いは命があり生き続ける。われわれ地上人のつくり出した想いは邪氣が入る、と天（神界）に戻らず、幽界の層となして地上界と天界の間に留まる。

霊の霊が主ぎ＝良心＝直霊＝神の心＝太陽＝お天道様＝神の歓び＝光り＝真善美愛＝キであると言っている。そのキがある為に人間となり、人間なるが故に神となり、神である故に喜びである。

他の生き物にはキあれど外のキであるぞとは、人間は内にキがあるが、他の生き物は外のキを受けて（取り入れて）その身体を動かしている。

・・・その10に続く

その10

「うちの自分は神であるが、外の自分は先祖であるぞ。先祖をおろそかにするでないぞ。先祖まつことは自分まつることぞ。外の自分と申しても肉体ばかりでないぞ。肉体霊も外の自分であるぞ。信じ切るからこそ飛躍するのぢやぞ。不信に進歩弥栄ないぞ。肉体霊も外の自分であるぞ。まかせ切るからこそ神となるのぢや。神に通ずるのぢや。他力で自力であるぞ。真剣なれば百年たっても同じ所ウヨウヨぢや。一步も進まん。進まんことは遅れていることぞ。真剣なれば失敗してもよいと申してあろうが。省みることによってさらに数倍することが得られるのであるぞ。いい加減が一旦成功しても土台ないから泡沫ぢや。下座の行、大切。」

では読み解きましょう

内の自分は神であるが（内の内には直霊があり＝神）である、外の自分は先祖であるぞ（外の自分とは肉体的自分＝先祖代々の遺伝子を受け継いでいる）外の自分と申しても肉体ばかりでないぞ。肉体霊も外の自分であるぞ（肉体霊は肉体が受け継いで来た霊的「想い」）

信じ切るからこそ飛躍するのぢやぞ（直霊に任せ＝神に任せ＝良心に任せ て動くからこそ飛躍するのぢや 自我の思いで身体を動かすと自分の良心を信じていない行動

ひふみ神示を「言霊」と「氣」で読み解く

となる 良心に任せて動くとその結果は最善最良のものとなり飛躍があるといっている。))

肉体霊も外の自分であるぞ。任せきるからこそ神となるのじゃ 自我の思いで動くときは(肉体霊の直霊と連動した)自然な動きでなく自分を(自分の直霊を)信じていない行動となる。良心に任せた行動は肉体霊が、(直霊と連動して)自分の動きを意識せずとも良い方に動かしてくれる。(直霊が肉体霊をして良い方向に動かしてくれる。)神に通じている動きである。

他力で(自我ではなく)自力である(自分の直霊の力)といっている。

真剣なれば失敗しても良いと申してあるが(真剣に良心にそっていれば)失敗は省みることによって必ず次の大きな成功の元となる。

真剣なければ(真剣にその道を追い求めていなければ)百年経ってもちっとも進んでおらんぞ。いい加減な生き方が土台がないから成功してもすぐ水の泡になる。 下座の行大切(つまり、おもてなしの心が大切)

以上が ひふみ神示 3 マツリの読み解きです。